

辞世

～その刻、
先人たちは何を思ったのか～

第3首目 細川 ガラシャ



散りぬへき 時しりてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ

(散るべき時を知っているからこそ、花も花なのであり、人も人なのである)

——突然の暗転

「明智光秀の娘」。まるで背負うべき十字架のように、この事実は彼女の後半生に重くのしかかった。

永禄6年(1563)に生まれた細川ガラシャこと明智玉子は、天正6年(1578)に織田信長の媒酌で細川忠興と結婚。子どもにも恵まれ順調な人生を歩んでいたが、天正10年(1582)に父光秀が本能寺の変を起こし信長を討ったことで事態は一変する。

味方になってくれという光秀の誘いを断った細川家は、身重のガラシャを京都の山奥へ幽閉という形でかくまった。2年後に豊臣秀吉に赦されて細川家に戻るものの、父の謀反や夫との不仲などで心労が重なった彼女は、いつしかキリスト教へ救いを見出していく。夫忠興は秀吉がキリスト教への迫害政策をすすめたこともあってか、妻の信仰には否定的であったが、彼女は天正15年(1587)夫の留守中に侍女の手をかりて密かに受洗し、「ガラシャ(恩寵/恩恵)」という洗礼名をもらいキリシタンとなった。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いが勃発すると、大名たちを西軍の味方に引き入れようとした石田三成が、大名たちの妻子を人質にするため、手始めに大坂の細川邸を包囲。三成から人質となるよう強要されたガラシャはこれを拒否すると、屋敷へ火を放ち自害した。

——花のように…

辞世は自害する直前に詠んだという1首である。この時、徳川家康に従って出陣中だった忠興は、出発前にガラシャへ「何事がある場合には恥なきように計らえ」と言い置いていったそうである。ガラシャの本心には色々葛藤があったかもしれないが、「キリシタンは自殺を禁じられているから」と、家臣に長

刀で自らの胸をつかせ壮絶な最期を遂げた。

「世の中の花というのは、散り時を心得ているからこそ美しいのだ。人もそうでなくてはなるまい。今こそ私の散り時なのだ」。和歌において「花」とは、桜をさす場合が多いそうだが、散る時は潔く散る桜に我が身をなぞらえた彼女の胸中へ思いをはせると、あはれを覚えずにはいられない。この後、ガラシャの自害に狼狽した三成はむやみに人質をとることを控え、忠興を始めとする東軍は一層戦意をたぎらせたというから、彼女の死は歴史の転換点にも影響を与えたといえるだろう。

興味深いことに、亡くなる直前ガラシャは手紙のやり取りをしていた宣教師へ、「自殺をすることは神への冒瀆になりはしないか」という趣旨の質問をしている。武家の子女として、キリシタンとして、東西どちらの倫理にも殉じる死を迎えようと心づもりしていた様子がうかがえる。結果的には彼女の願い通り、その死はヨーロッパでは「殉教」と称えられ戯曲にまでなり、日本では「義死」と敬われ後世の人々の心にながく残ることとなった。

だが、ガラシャの辞世を読み込んでいくと、そういった東西の倫理から得られる評価で覆い隠した意地のようなものがある気がしてならない。本来ならば本能寺の変の時、ほかの明智一族と共に終えるはずだった命の灯火を吹き消す機会を、彼女はずっと探し求めていたのではないだろうか。桜が潔く散る様には、自我が宿っているのかとさえ疑ってしまう時があるが、彼女が自ら死を選んだ根底には、「殉教」や「義死」といった死生観以外の何かがあったのではないかと思う。「花はだれのためでもなく、自分のために散っている」。この辞世からは、そんな声が聞こえてきそうである。

(執筆/ライター 青山繁樹)